ベーツ先生のこと

細　見　和　志

ふとしたきっかけで目にとまった文章の内容が、記憶の片隅にひっかかって離れないことがある。なぜ引っかかっているのか、ゆっくり考えている暇はない。でもきっとなにか自分にとって大切なメッセージが隠されているに違いないと思って、とりあえず引出しにしまっておく。

このチャペル週報の原稿を考えているときにも、そうした文章の一つに出会った。「関西学院広報」（Vol.252）に、学院史編纂室の池田さんがお書きになった「ベーツ先生の原点」という記事がそれだ。

ベーツ先生といえば、関西学院第４代院長として、学院の運営と発展に多大な貢献をされ、学院史のなかで特に目立つ人物のひとりである。関西学院に連なる者なら、ベーツ先生の名前は聞いたことはなくても、彼が提唱した「Mastery for Service」は知っているはずだ。

ベーツ先生の写真を見たことがある。そのほとんどが数人の学生と同僚の教員と一緒の集合写真だが、ベーツ先生だけは一目でどこにいるのかがわかる。学院史を彩る数々の偉い先生がたのなかでいちばん好きな人物はと聞かれたら、私は迷わずベーツ先生の名前を挙げる。

池田さんの文章に目がとまった理由の一つは、たぶんベーツ先生に関する記事であったからだろう。だが、それだけではない。偉大なる院長、ベーツのエピソードを紹介した文章はこれまでに何度か読んでいる。そのつど興味深く読んだが、記憶にはあまり残っていない。では、どこにひっかかったのか。

それはこの記事の次のくだりである。「少年時代のベーツは、日曜日の朝は長老派、午後は英国国教会、夕方はメソジスト教会に通っていました。この３つの異なる教会での祈り、礼拝、讃美の経験が、自分のライフワークの原点だったと晩年のベーツは振り返っています。」

一般のクリスチャンは、日曜日に教派の異なる教会の「はしご」などはしない。日曜日の朝、自分の属する教会の礼拝に出席すればそれでいいのである。しかし、ベーツは３つの教派の違う教会に通い、しかもその経験が彼の人生に重大な意味を持っていたというのである。

私がこの記事に目をとめた理由は、ベーツがメソジスト教会の信者でありながら、他の教派にも深い共感と敬意を抱いていたことを知ったからである。こうした彼の宗教的な寛容の精神を育んだのは、宗教的にも言語・文化的にも多様なカナダの小さな村であった。異なる文化や宗教の共生が課題となっている今日、私は「ベーツ先生の原点」に立ち戻って考えてみたいと思った。

（総合政策学部教授）

◇ランバス早天祈祷会　毎金曜日　午前８:00～８:20　於：ランバス記念礼拝堂（上ケ原）
７月10日（金）夏休みを前にして　　舟　木　　譲
◇総合政策学部早天祈祷会　毎木曜日　午前８:40～　　於：宗 教 主 事 室